

## 自己紹介

北川 一明

日本キリスト教教育学会参加をきっかけに、協力研究員に加えていただきました明治学院牧師のキタガワです。教会牧師から学校チャプレンに転身し、教会と学校の役割の違いを考えさせられています。

学院牧師として牧師仲間から期待されていることは、キリスト教学校が学生・生徒にもっとキリスト教を教える（それもキリスト教知識ではなく信仰そのものを教える）ことです。しかし正統信仰を継承する役割は、本来は学校ではなくキリスト教会と教派神学校が担っていたはずで、一般諸学の研究機関としての側面を考えれば、キリスト教学校の使命はむしろ正統信仰を建設的、対話的に批判することとも言えます。

教会が伝道に失敗し、教会だけの力では正統信仰を継承し切れなくなりつつある昨今、役割分担にも混

乱が生じているように見えます。

教会の年齢別教勢は、これまで長く坂道を下って来ました。ヘボンの伝統をくむ改革長老教会に限っては、坂道どころではありません。もうこの先には断崖絶壁しかありません。今という時代は、まさに絶壁の突端から足を踏み外した瞬間かもしれません。大学がちょっとでも正統信仰を批判しようものなら、瀕死の教会はたちまち倒れてしまいます。

そのため教会は批判を許さず、ただただ正統信仰を連呼するようになりました。そんな教会から見ると大学は悪魔の巣窟です。「大学を信仰的に厳しく指導監督してやるか、さもなくば異端として破門しなければならない」という発想に陥ります。

いっぽうキリスト教信仰を基盤とする大学には、人間が真理を完全に所有することはないという大前提があります。クリスチャンの側が、まるで真理の唯一の担い手であるかのように権威を振りかざしている、プライドの高い大学教授連中がクリスチャンを相手にしなくなるのは当然です。

しかし大学が教会と無関係に独りで真理を探求し始めると、判断基準を自己自身の内に置くこととなります。それでは大学の批判的研究は、ただ相対主義の中で人間が相互に批判し合うだけになってしまいます。教会と大学との距離が離れば、大学は飼いの羊の状態になり、ますます教会から信用されなくなります。

日本の教会と大学の関係は、今はこのような悪循環に陥っているのかもしれませんが。そんな中であって、日本基督教団教務教師である学院牧師として何が出来るのか、悩ましいところです。

生きている神が、自分に対して実際に・具体的に働きかけてくださったことを想起・再確信すれば、信仰は必ず回復します。

しかしこうした信仰は「教育」では伝達できません。超越神の隠れた働きかけを目に見える仕方で表わす、つまり生きた神を証しする必要があります。

「証し」と「教育」はちよつと違いますから、学生・生徒に「信仰を教育すべきだ」という教会の発想には少し無理があるように感じられます。

ついでに言えば、教会の礼拝説教も《教える説教者》と《教わる信徒》という関係が出来上がってしまっていることにも疑問を感じます。牧師、教会、クリスチャンは常に真理を所有している側にいて、その点でそれぞれ一般信徒、世俗世間、未信者に対して優位に立っているという考え方が、そもそも福音の精神に反すると思います。

落ち目の宗教が空威張りしては、権威を取り戻すためには逆効果です。説教者と礼拝会衆の間に、教職員と学生・生徒の間に、クリスチャンと未信者の間に福音的な関係が作り上げられる時に、神が生きて働いておられることが明らかになるのではないのでしょうか。

教会とキリスト教学校も同じです。学校と教会の関係が福音的に作り直される時には、ただ関係が回復するに留まらず、生ける神が新たに証しされるのでしょう。

学院内では、正統信仰が批判される中、独り正統主義擁護の側に立つことが、学院牧師本来の務めだったでしょう。学院牧師が霊的権威の担い手であるのなら、所与の霊的権能を大威張りで行使しなくてはいけないのかもしれませんが。しかし今は、それ以前の仕事が山積している気がしています。

(きたがわ かずあき 学院牧師・協力研究員)

